

2023年12月6日(水) 14:00-16:30 @シネマ・チュプキ・タバタ シアター 参加者：10名

テーマ ユニバーサルシアターの未来 ②

ゲスト 和田 浩章さん (音声ガイド ディスクライバー)

小笠原 尚軌さん (日本映像翻訳アカデミー バリアフリー事業部 ディレクター)

参加者へのメッセージ

“ いよいよ最終回となりました。前回に引き続き、「ユニバーサルシアターの未来」と題し、改めてチュプキが「ユニバーサル」と伝える原点に戻って、みなさんとお話したいと思います。

昨今、様々なところで「多様性」という言葉が当たり前にも聞こえるようになりました。制度の面でも、2024年4月1日の「改正障害者差別解消法」の施行により、民間事業者の合理的配慮が義務となり、映画業界においては、視覚障害者用の音声ガイドと聴覚障害者用の字幕を提供することが求められるなど、少しずつ、理想の社会に近づいているようにも見えます。しかし、その制度が「合理的配慮の義務」と位置付けられていることには、疑問や不安を抱かずにはられません。果たして、合理的な配慮が義務付けられた社会は、暮らしやすい社会と言えるのでしょうか？

チュプキでは、視覚に障害のあるお客様のために設計されたこだわりのサウンドが、唯一無二の体験ができると評判になり、映画館を選ぶ際の重要な要素のひとつとなっています。これは、そのお客様の存在があったからこそ、みんなの体験が進化したと言えます。多様性とは、いまある枠組み（マジョリティがマイノリティを包摂するという発想で作られた）を問い直すための言葉ではないでしょうか。

そこで今回は、未来に向けて新しい取り組みに挑み続ける、和田浩章さんと小笠原尚軌さんをゲストにお迎えします。和田さんは、音声ガイドのエンタメ化を目標に、最新作の映画で人気声優を起用するなど、新しいファンの獲得に邁進されています。小笠原さんは、国内外の字幕・音声ガイドの制作統括を行うなかで、業界の今後について前向きな可能性を感じていらっしゃるようです。

「映画を共に楽しむ」とはどういうことかの原点に立ち返りながら、改めて、わたしたちの現在地を確認し、取り組むべき課題を見極めることで、サロンの総まとめとしたいと思います。”

最終回は、映画配信における制作の現状と業界の今後について、ゲストのお二人の対談形式でいかが이었습니다。また、実際の映像作品をスクリーンに投影しながら、制作上の工夫についても聞きました。全体対話では、海外の音声ガイド制作に携わる参加者による、AI技術の導入状況やプロセスの違いや、ろう者や視覚障害のある参加者による、ユーザーとしての使い心地についてのシェアがありました。AI技術をコストカットのみを考えて導入すると、作品の芸術性を損う懸念がある一方で、情報保障の面では、より多くの作品がカバーされ、ユーザーの選択肢が広がるという期待が持てること。また、ユニバーサルデザインの発想からのツールや設備の開発によって、誰にとっても未知の映画体験が生まれることなど、未来に向けた明るい見通しがいくつも示されました。

最後は、チュプキ代表の平塚さんが、「それぞれの人が命を持って生きているからこそ、制作や環境づくりに思いが生まれる。さまざまな困難はあるが、芯を持って、人と文化の豊かさを一緒に大事にしていきたい」と締めくくりました。参加者からは、「毎回多くの学びがあり、刺激的な時間を過ごせた」「貴重な場。ぜひ継続を」などの声が寄せられました。

このレポートでは、当日の対話を抜粋、編集してお伝えします。 (構成・文：舟之川)

プロジェクト運営メンバー 平塚千穂子 (シネマ・チュプキ・タバタ代表) / 石井健介 (ブラインド・コミュニケーター)  
舟之川聖子 (コーディネーター) / 吉川真以 (コーディネーター)

石井：今日最終回のテーマは、「ユニバーサルシアターの未来②」です。

平塚：今日は配信の音声ガイドについて扱ってみようということになりました。今、音声ガイドの普及が進んでいるのが、映画配信の業界です。その最も“合理的配慮化され”、最もチャンスがある現場に立たれている小笠原さんと、非常に革新的な音声ガイドを作られてきた和田さんにゲストとして話していただくことで、ユニバーサルデザインという観点から、映画や映画館の可能性をみんなで語り合えたらと思います。ではお二方、よろしくお願いします。

## 自己紹介

小笠原：みなさん、はじめまして。日本映像翻訳アカデミー（以下JVTA）の小笠原尚軌と申します。バリアフリー事業部のリーダーをしております。映像をユニバーサルに伝えるという世界があるということは10年前に知って、そのときになんだこれはとかなり衝撃を受けました。それまではエンターテインメントを紹介する雑誌の編集をしていたのですが、字幕・音声ガイドのことをちょっと勉強してみようと思って、JVTAの門戸を叩きました。その後いろいろとご縁があって、働くことになりました。実は、音声ガイドの事業にどっぷり浸かったのは、ここ2年ぐらいです。担当してきた作品は、映画、ドラマ、アニメ、ドキュメンタリーなどです。では、和田さんも自己紹介をお願いします。

和田：和田浩章と申します。わたしは以前チュプキで支配人として従事しておりました。当時、どうしたらもっとお客さんに来てもらえるだろうと考えて、声優さんとコラボして、音声ガイドをエンタメ化することに挑戦しました。そうしたら、声優ファンやアニメファンの方、普段バリアフリーにあまり興味はないであろう人たちが、チュプキに足を運んでくださいました。2020年に島根県に移住して、小野沢シネマという映画館を立ち上げました。フリーで音声ガイドの制作もしていて、小笠原さんとご一緒することも多いです。チュプキから教わったことを配信業界にもどうやって活かせるか、奮闘している最中です。

小笠原：JVTAについて簡単にご紹介しますと、映像翻訳者を育成する学校として、1996年にスタートしました。海外の作品を日本に届けるために、日本語字幕や吹替翻訳をつけるのが始まりでした。その後、2011年にバリアフリー講座を始めました。代表がCity Lightsさんの取り組みなどを見て、これはすごいということ。2010年には日本語のコンテンツを海外へ出していく際の日英映像翻訳者の育成も始めました。英語をはじめとして、さまざまな言語の字幕や吹替の制作も行なっています。わたしのミッションとしては、字幕・音声ガイドが書けるようになってみたいという人をどんどん業界に出していくことです。字幕ライターやディスクリャイバーの活躍の場が増えていくことで、良い未来を描けるのではないかと思います。日々受発注と教育の両輪で進めております。

和田：JVTAさんにはわたしも講師としても関わらせてもらっています。小笠原さんがバリアフリー講座のカリキュラムを組んでいて、作品解釈に特化した授業を組んでくださったり、元編集者ならではの裏取りの仕方、つまり事実関係を確認して、正確なことを伝えるということも、教えとして入れてくださっています。



小笠原さん（左）、和田さん（右）

## 配信の音声ガイド

小笠原：では今日の本題に入っていきます。NetflixやAmazonプライム・ビデオなどの配信プラットフォームで、タイトルの近くに「AD」というマークがついている作品があります。



Netflix の場合、AD マークの上にカーソルを置くと、吹き出しで「音声ガイドと字幕ガイドをご利用いただけます」という案内が付きまします。AD というのは Audio Description の略で、基本的には音声ガイドのことだと思っていただいてもいいと思います。

わたしたちは、配信の音声ガイドも、劇場上映の音声ガイドと変わらず、作品性を大切に作っています。わたしたちが音声ガイド制作において目指しているのは、「ユニバーサルに伝える」ということなんですよ。わたし自身、ここで映画を観たときにすごく感動したんです。人それぞれ状況が違っていても、めちゃくちゃ一緒に楽しんでいるこの空間の雰囲気というんでしょうか、それに震えるほど感動してしまって、「視聴する体験ってこうあるべきだよな！」と思ったんですよ。そういう点で、すごくうまくいったと思っているのが、和田さんと作ったトークショー番組の音声ガイドです。今、冒頭部分をお見せします。

*(スクリーンに投影しながら音声ガイドを鑑賞。ろうの方には手話通訳が付く)*

**小笠原**：これを観たうちのスタッフから、「これ、音声ガイドだったんですか！ 本編だと思った」と言われて、なんかここに「ユニバーサルに伝える」ということが一つ、形としてできたんじゃないかと思いました。

**和田**：このトーク番組は、出演者の方々がかなりご自身をさらけ出しておられたので、原稿を書く前に、かれらの歴史を調べました。出演者の方が書かれたエッセイを熟読したり、ありとあらゆるインタビュー記事を引っ張ってきて、何がこの方を形成してきたのか、この方がどんなふうになんかを送ってきて、どんな経緯で今のこのステイタスにあるのか。それらをきちんと紐解かないと、この作品とは対峙してはいけないと思ったんです。ただの作業であれば、映っているものをただ言うガイドを書けばよかったんです。でも、わたしはチュプキではそんな教えは受けなかったもので（笑）。逆にとことん作品に入り込むことを教わりました。さらに、いろんなツールや環境での視聴も考慮しました。家でテレビで観る人もいれば、スマホで電車内で観る人もいます。いろんな場所とツールで試しました。先ほど見ていただいたところはオープニングの非常に大事なシーンで、テーマ曲も重要だったので、

音声ガイドを入れるときにその歌詞がしっかりと聞こえるように工夫をしました。

**小笠原**：和田さんからその話を聞いて、ああ、ものづくりってやっぱこういうことだよなと思ったんですよ。人の胸に残る言葉というのは、徹底的に調べた上で出てくるものだという事は、わたしも原稿を書く仕事をしてきたから、よくわかる。今、動画配信の音声ガイド制作は、わりとビジネスライクに回っているのかなと感じています。発注した、受注した、ルール通りに納品した……という感じで。そういった流れの中にあっても、しっかりとその作品の中に入り込めるような音声ガイドもあれば、そうではないものもある。もちろんルール通りの納品で OK なんですよ。ただ、実際のユーザーの視点に立ったときには、もっと考え抜いて、どこを効かせて、どこを引いて……としたい。我ながら少々コスパの悪いことをしているなどは思うんですが（笑）。でも、ある作品を観て救われたり、明日をちょっと変えてみようかなと思う人がいるから、その人たちのためにがんばるという感じですよ。

**和田**：僕もコストダウンの圧力とは日々戦っています。でも、工夫したことは必ずお客様には伝わるんですよ。だからお客様を信じて、きちんとした制作物を作っていくことこそが正しい姿なんじゃないかと思っています。

**小笠原**：受注の大まかな流れをご説明しておくと、上流から下流へ発注する構造だとすると、上にいるのは、グローバルな動画配信事業者ですね。中にポストプロダクションや音声ガイド制作事業会社があり、下に JVTA や和田さんのようなフリーランスのディスクライバーがいるという図かなと思います。

## ユニバーサルデザインのためのチーム制作

**小笠原**：うちは、制作体制としては、わたし含めて収録ディレクターが数名いて、チームで作っています。チームにはベテランの人も駆け出しの人も入っていて、お互いに助け合います。わたしがよくチームのディスクライバーたちに伝えているのが、「チームで作品に向かい合う」「ディスカッションして言葉選びをする」「他の人の原稿を貶めない」「思ったことはち

ゃんと言おう」「あがった意見は本気で聞こう」という、どんなチームづくりでも当たり前のことなんです。目指すはやはりユニバーサルデザイン、そのためにチームで制作する体制をとっています。

**和田：**僕がこのチーム制作にリーダーとして入るときは、それぞれの凸と凹をどうやったらプラスに変換できるのか、面白くできるのかを考えています。ただ、たとえば、1話から10話ある作品で、「1話の音声ガイドは面白かったけど、2話は面白くないな」となるとはいけないので、各人の表現は尊重はしつつも、1話から10話まで、観る人にとって違和感がないように表現を統一したり、気を配っています。小笠原さんは、上手い人たちだけを集めることは一切なくて、いつもちょっとしたチャレンジを求められる。でも、だからこそ、自分では思いつかないアイデアがメンバーから出てきたり、自分のストックでは思い浮かばなかった表現に触れて、学ぶことが多いです。

## AI が読む音声ガイド

**小笠原：**今、新しい流れがきています。AI が読む音声ガイドですね。みなさんにも観ていただきたいので、ちょっと流しますね。これは秋に出た作品で、合成音声でナレーションをしています。

(鑑賞)

**和田：**どうでしょう。ここはかなり緊迫感のあるシーンなんですけど、音声からはそういう情感が伝わってこなかったかなと思います。しかも音声ガイドが流れるときに本編音声はぐっと音量が下がります。そして、音声ガイドが終わった瞬間にまた本編の音量がぐっと上がります。音声ガイドが流れているときは、裏で何の音楽や効果音が鳴っているのか、いまいまいちわからなかったと思います。僕も今、合成音声の案件をやらせていただいているんですけど、人が読む場合とは全然違う課題があるので、限られた機能の中で、いかにより作品にできるか、いろいろと工夫しながら、AI と戦っている状況です。

**小笠原：**『AI と戦う』、映画のタイトルみたい(笑)。

## バリアフリー字幕

**小笠原：**バリアフリー字幕の制作も見ていただきます。

(鑑賞)

**小笠原：**少し解説しますと、音声ガイドと同じで、字幕もやはりパッションを込めないと良い原稿はできないので、さまざまな工夫を凝らしています。たとえば、悲鳴や叫び声のセリフがいっぱい出てきましたが、これは声を拾いすぎても、文字だらけになってしまっただけで楽しめないんです。そのため、適度にポイントを押さえて文字にしています。たとえば、「うわー」とか「ぐえっ」などは書くけれど、声が出ていてもあえて字幕にしないところも作るという形です。そこは映像を見せるという意図になっています。シーンや物語が進行するのに合わせて、文字表記や表現も少しずつ変えます。それによって、より臨場感のある映像体験ができるよう、細かな工夫がなされています。「バリアフリー字幕ってただの日本語の書き起こしでしょ」と言われがちなんですけど、ここにも深いスキルがあるので、その点は社会にどんどん伝えていかなくてはと思っています。

## ユニバーサルな上映空間

**小笠原：**グローバルな動画配信サービスの盛り上がりがあったり、バリアフリー上映もやっという動きが少しずつ出てきています。ただ、わたしとしては、本質的にはシネマ・チュプキ・タバタのようなローカルな場で、丁寧にユニバーサルに作品を届けていくことには、代え難いものがあると思うんです。

**和田：**映画館の閉館が続々と起きていますが、一方で、人が集って、この場でしか味わえない映像体験を提供しようと、いろんな映画館が特色を出してきているとも思います。映像や音響でいえば Dolby Atmos や IMAX 4DX という技術もありますし、チュプキが音声ガイドや字幕に特化した映画館というところも、この場でしか味わえない空気感や体験につながると僕は思っています。その音声ガイドも、今はイヤホンで聞いてますけれども、スピーカーから流すのもありじゃないかと思うんですよね。包まれるようなナレーシ

ョンや、後ろから音声ガイドをかけるとか、まだまだ音声ガイドには開拓の余地があるんじゃないかと。

「“お国”が決めた制度だから、やらなきゃいけないからやる」姿勢が拭いきれてない音声ガイドが世界各国に多いなと感じます。日本は遅れてきた分、エンドユーザーの声をきちんと拾いながら作っていける余地があると思うんです。同じ音声ガイドでも、ものによっては黒子のように、ものによっては作品のようによいか。いろんな音声ガイドの流派はあるものの、ここまで丁寧に作っているのは日本ならではだとも僕は感じています。こういうニッチな作り方を逆に世界に届けるぐらいのことができたらいんじゃないでしょうか。今日聞いてくださったみなさんとも、変えていく流れを生み出せていけたらと思います。

**石井：**小笠原さん、和田さん、ありがとうございます。

## ユニバーサルシアターの未来を考える

石井：後半はお二人の発表を受けて、みなさんの感想を聞いていきたいと思います

### 合成音声は主流になるか

**参加者 a：**数年前にJVTAさんの音声ガイド講座に通ってました。わたしは去年から海外の制作会社に登録して、音声ガイドを書く仕事もしています。英語の映像を見ながら、日本語の音声ガイドをつける作業です。その経験から言うと、合成音声に振り切った流れにはなっています。コストを重視したやり方なので、モニター会もやらないし、そもそもモニターではなくてQC（Quality Control）というのですが、できた原稿をQCの方に送って、チェックしてもらって、フィードバックが来るというやり取りをするだけで、それも人によりますが、ほとんどが最低限の回数で終わります。一方で、日本のやり方は、コスト的に割に合わない部分もあると思うのですが、その場で実際に対話をして良くしていく現場はすごく豊かだと思います。合成音声の方も、今はまだイントネーションやピッチなどを原稿を書く人が細かく指示しなくてはいけない段階です。今後どう変わっていくのか、両方がどうい

うふうに共存していけるのかを考えながら、お話を聞いていました。

**和田：**この先、合成音声が主流になっていくんだろうなということは、ひしひしと感じています。ただ、人間（ナレーター）が読んだものは雑味が入ったり、その人の見方によって情感の付け方が変わったりするんですよね。僕はそれも含めて音声ガイドの作品だと思います。合成音声しか選択肢がないというのは、それはもう「作品を作る」という意識ではないんだろうなあと思ってしまいます。作品としての音声ガイドは、公式には一つしか作れないので、それを合成音声のみにしてしまうのは、けっこう好き嫌いが分かれるとは思いますが。もちろん、「合成音声はよくない」とただ言っているだけでは全然建設的じゃないので、いかにそこを突破しながら面白いものを作れるかが、今後の課題になってくると思います。

**小笠原：**もしかしたら配信プラットフォームの考えとクリエイターさんたちの思いは、必ずしも一致はしていないかもしれませんね。ただ、わたしは和田さんが書いた『火の鳥 エデンの花』（2023年公開）の音声ガイドを聞いたときに……いや、聞いたというか、あれはもう“体験”ですよ。音声ガイドの潮流が変わると思ったし、これはもう映画館に行くという体験そのものが変わるんじゃないか……それくらい素晴らしかったです。これは勝手な想像ですが、今後は音声ガイドを付けるか、付けないかという次元も超えた何かになっていくんじゃないかという気がしています。

**和田：**何もなかったところに、新たにものを作って息吹を吹き込んでいくという点では、かつて平塚さん達がCity Lightsを立ち上げて、「音声ガイドを使って一緒に映画を観よう」と活動を始めた頃の感じに似ているなあと思います。

### 視覚障害のあるユーザーの立場から

**参加者 b：**コストが理由で音声ガイドが付く機会が減っていくのは、ユーザーにとっても残念なことなので、コストダウンできるのはいい面だと思います。その場合も、届ける側や作る側が、作品の一部としてこだわりの持って、ナレーションなのか、音声合成なのかを選択してほしい。その上で、「音声ガイドは単に付属するものなので、この作品は合成音声で作りました

た」と、制作側がそう決めるのであれば、わたしは納得できます。わたしはけっこう音声ガイドなしで観るのも好きなので、「音声ガイドなしで完成形です」とされている作品があっても、そういうものなんだと受け入れられるかな。

**和田：**ちなみに石井さんはどう思いましたか。

**石井：**僕も音声ガイドなしで観るときがあるので、さっき合成音声で観たような感じだったら、なしで観るかな。選択肢があるといいですね。「AD」マークの中の音声ガイドで、「合成音声またはナレーションバージョン」が選べるようになるとか。もちろんコストを考えると現実的ではないかもしれないんですけど。僕がモニターで参加している作品は、ナレーターの方が読んでくれていて、それも作品の一部として感動することが多いです。ただ、Netflixの作品を合成音声で全部観られるようになったとしたら、それはそれですごく幸せなことだと思います。一方で、音声ガイドに付加価値をつけて、プロモーションする方向もありかなと。超大作や特別な作品では有名な声優のナレーターに迎えるとか。



質問に答える小笠原さん（左）

### 聴覚障害のユーザーの立場から

**石井：**ろうの方にとっての、配信のバリアフリー字幕のクオリティの話もぜひ聞いてみたいです。

**参加者 c：**Netflixに関しては、去年、『First Love 初恋』という手話表現の入った映画を観ました。字幕もついていて、いいなと思っています。ろう者の友人たちからは、Netflixは全部字幕が付いているので、よく観ているという話は聞きますね。わたしは月々払っているんですが、なかなか観られていなくて（笑）。CS放送では宝塚の舞台も配信をされていて、最近の作

品には字幕が付くようになっていそうです。ろう者のお客様が要望をして付くようになったと聞いています。ただ、過去の作品には字幕が付いていないそうです。最近のものは全部観てしまったけれど、過去の作品には字幕が付かないので、もう観るのをやめてしまったという友人もいます。そういう問題もあるようです。

**参加者 d：**ちょっとこの流れでcさんにお伺いしたいのですが、テレビにろう者のための字幕がついていると思いますが、あれは役立っていますか。

**参加者 c：**字幕は見ています。テレビは40年ぐらい前から、NHKのドラマで字幕が付くようになったそうです。以前に比べると質も良くなっていると思います。たとえば「要約字幕」。言葉通りに字幕を出しても、文字数が多くて読みきれない、意味がわからないだろうということで、要約した字幕が付けられていました。でも、口の形と字幕とを照らし合わせると違うことにろう者が気づいて、それにちょっと不満を感じて要望を出したそうです。今は話している言葉通りに字幕が付くようになっていいます。効果音の説明もいろいろ工夫されていると思います。先日、朝ドラを見ていたら、「（小声）」のように声の抑揚や話し方も、字幕に説明がついているようになっていっているので、良くなっていると感じます。作品のポイントをつかんで伝えられるように、字幕も工夫されているようです。

**和田：**生放送の情報番組はかなり遅れて字幕が出るから、見づらくはないですか。

**参加者 c：**ずれがあると、やっぱり見ていると混乱しますね。生放送の情報番組の字幕は、その場で打ち込んで出していると思いますので、技術的な問題がまだあるでしょう。ただ、オリンピック・パラリンピックのときの解説番組で、映像を30秒遅らせて、字幕と同時に出すという実験的な試みをNHKがやったんですよね。映像と同時に字幕が出るのはとても良かったです。

### 日本の映像業界

**参加者 e：**自分は映画館の人間なので、やはりコストの話が気になりました。ミニシアターでしか上映され

ないインディーズの映画には、ほぼ音声ガイドが付いていない。配信のお金の回り方をモデルにして、もっと映像界全体で音声ガイドを普及できないかなと思うんですが……。

**和田：**本当に日本の映画業界が変わらなければならぬ節目だと思います。日本のインディペンデント系の映画は本当に資本が少なく、赤字で作っている方が山ほどいらっしゃるの、音声ガイドの制作費まで捻出するのは厳しい。どうやってこれを解消していくかは難題です。今すぐここで答えが出るようなものではないですが、どこに伝えれば何が起きるのかというところは、劇場側も描いていかなければいけないと思います。映画館がどんどん閉館していつてしまっ、岩波ホールのような劇場がなくなるといのは、文化的な損失が非常に大きいですし……。

小野沢シネマは、13年間、映画館がなかったまちに再建したんです。何が起きたか。昨年、『スラムダンク』を上映しました。高校のバスケット部を題材にしたアニメーション映画ですね。そうしたら近所の中学生や小学生が、公園でダムダムダムダム（ドリブル練習）しているのを見るようになったんですよ。その公園にはリングはないんですけどね。でも、かれらはたぶん映画を観た後の興奮で、とにかくバスケットボールを買ってきて、一緒に観た子達で「バスケしようぜ」みたいな流れがあったんでしょう。そういう姿を見たときに、やっぱり映像の影響力のすごさがひしひしと伝わってきたんですね。若者にとっては一瞬の出来事かもしれないんですけど、映画館で映画を観たことで、もしかしたら少し人生が変わっているかもしれないですよ。そういう可能性を考えると、僕は、インディペンデントの映画には音声ガイドをつけなくていいとは決して思えない。

**石井：**ここ2回のサロンで具体的なお話を聞いてきて、いろんなトピックが出て、いろんな課題が見えてきました。現在地もクリアになったように思います。

## 人間だからこそその想い

石井：では、そろそろ終了時刻なので、ぜひ明るい方を向いて終われたらいいなと思うのですが、平塚さん、いかがでしょうか。

**平塚：**今日のお話、大変興味深く聞かせていただきました。合成音声の音声ガイドって、わたしはもっと聞きづらいのかなと思ってたんですけど、さっき聞いた感じでは、情報をとる分にはよいのかなと思いました。でも、このサロンでさんざん語ってきた一番大事なことは、さっきのプレゼンで言っていたような、音声ガイド作りにおける、「人間だからこそ書ける」という部分だと思います。作った人の想いや観る人の想い、それぞれの人が命を持って生きているからこそ、背景や関係性も大事にしたいという想いが生まれる。接客にしても、環境作りにしてもそうですよね。ミニシアターの存続も危ぶまれてはいますけれども、シネコンにはない味がミニシアターにはある、という話にも通じるのかなと思います。この一年間を通じて、いろんなサロンをやってきたけれども、結局立ち返るところはそこだな。だから、法律が変わって便利さが求められたり、コストを下げて大量生産できるシステムになって、そしてその役割を担っている人たちから、時には“妨害”されるようなことも起こるかもしれないけれども、やっぱり芯を大事にして、いろんな圧力に抗いながら、文化や人の豊かさを一緒に大事にしていけたらと思いました。

**宮島：**僕もひといいですか。実はさっきミラクルが起こったんです。今日から2日間、地域の中学生が6人、シアタードーナツに職場体験学習に来てくれます。かれらにはシアタードーナツの体験をしてもらいました。午前は、ここ沖縄市で生活している、沖縄戦を生き延びてきた88歳のおばあちゃんのドキュメンタリーを観て、午後は、『はだしのゲン』の中沢啓治さんのドキュメンタリーを観てくれたんです。ミラクルが起こったっていうのは、なんとこの88歳のおばあちゃん本人が、上映後にロビーに座っているんですよ（笑）。かれらは映画を観たあとに、本物の彼女と触れあうことができたんです。うちは2スクリーンあるので、同じ時間帯にもう1本別の映画で助産師さんのドキュメンタリーをやっています。上映後に、

生後1ヶ月と1週間の赤ちゃんを連れてお母さんが出てきたんです。そうしたら、その中学1年生の男の子が、ロビーで赤ちゃんに出くわして、ぼそっと「抱っこしていいですか」って言ったんです。そのお母さんは快くどうぞどうぞと言って、みんなで赤ちゃんを抱っこしていた。88歳のおばあちゃんに会った後に、生後間もない赤ちゃんに会い……このシアタードーナツの5時間の体験で、かれらは命についてすごく刺激的な時間を過ごせた……我ながら今日のシアタードーナツはいい仕事したなと思って！

**会場：**（拍手）

**石井：**素晴らしい！

**宮島：**コツコツと営業活動をしてきたことの賜物の瞬間だなーと思って、今日はとてもいい日です。こういう人と人とのコミュニケーションなしにユニバーサルな世界はできない。向こうから勝手にはやっこないんだよね。ただ、切ないのが、シアタードーナツは道路の拡張工事で立ち退きが決まっているから、2年後3年後はどうなってるかわかんないですけども。でも僕はこのサロンに9月にたまたま入って、毎月Zoomで参加させてもらって、刺激をもらっているので、次のシアタードーナツを作るときは、このサロンのこともしっかり参考にして、僕なりのユニバーサルシアターってどんなことなんだろうなと考えていきたいです。いい機会をありがとうございました！

**平塚：**ありがとうございました。

**石井：**今年度のチュプキサロンはこれで終了となります。みなさん、ご参加いただき、本当にありがとうございました！

（終）

（構成・文：舟之川聖子）



夜のチュプキ外観



サロン開始前、準備中の会場